

# てきおう

No. 03

JUNE  
2023

撮影：ひろしま気候変動適応センター



写真：みかんの花

みかんを含め、多くの生物は気候変動の影響を受けています。農作物については品種や栽培技術の改良などによって、気候変動への適応が進められています

第3号

# 気候の変化がもたらす身近な自然への影響

日本には四季があり、春にはさくらの開花、秋には紅葉など、その季節に特徴的な生物の変化があります。このような植物や動物の季節性のことを“生物季節”といいます。生物季節が気候変動の影響を受けています。

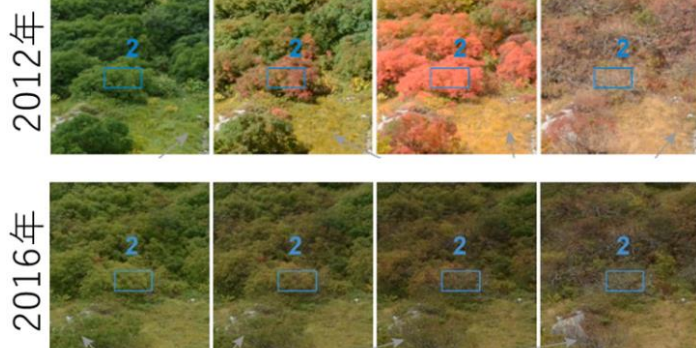
## 植物への影響



広島市では、1953年以降、さくらの開花日が、10年あたり1.3日早くなっています。実際の開花日を見ると、およそ50年前の1970年は4月6日でしたが、2020年は3月22日でした。

また、かえでの紅葉日は、10年あたり0.4日遅くなっており、1970年は11月27日、2020年は11月24日でした。

県外の例では、中央アルプスの一部（図1）のように、まったく紅葉せずに緑のまま葉を落とす現象が報告されており、植物への影響が懸念されています。



(Koide et al. 2019)

図1 中央アルプス駒ヶ岳の極楽平における秋の紅葉の遅延・異変\*

(左から右の写真へ日数が経過)

2012年(上段)は紅葉後に落葉しているが2016年(下段)は紅葉せず落葉している

## 動物への影響

広島市では、1953年以降、あぶらぜみの初見日が、10年あたり1.4日、つくつくほうしが2.6日早くなっています。

また、もんしろちょうの初見日が10年あたり4.1日遅くなっています。

実際の初見日を見ると、あぶら

ぜみ、つくつくほうし、もんしろちょうはそれぞれ、1970年は7月21日、7月27日、2月25日でしたが、2020年は7月17日、7月20日、4月8日でした。

## 気候変動への適応

多くの生物は、環境に対応して進化するため、気候変動にも適応し、生き残ることができます。しかし、近年の気候変動は急速であるため、進化速度が遅いなどの理由により、変化に適応しにくい生物は絶滅するおそれがあります。気温上昇が大きいほど生物への影響は大きくなります。そのため、省エネ等の地球温暖化の抑制・緩和策に加え、私たちの暮らしや仕組み等を気候変動に合わせて変えていく適応策が重要となります。一例として、作物の品種改良等の取組が行われています（表紙参照）。

「進化速度が遅い」生物  
=気候変動の速度に追いつけず  
絶滅のおそれがある。

気候変動の進行

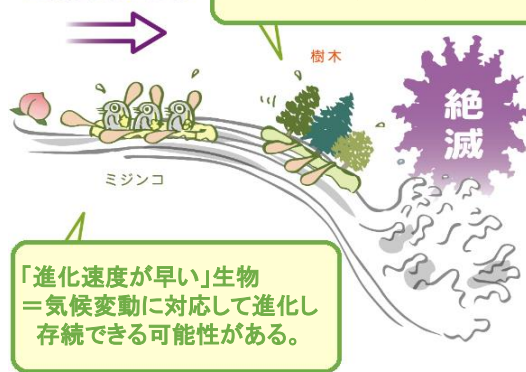


図2 気候変動は「激流」であり進化速度が遅い生物は絶滅しやすい\*\*

出典: \*Koide, D. et al. (2019) Ecological Indicators, 106(3): 105482.

\*\*気候変動適応情報プラットフォームの図を一部変更  
気候変動監視レポート2022(気象庁)

広島市のデータは生物季節観測の情報(気象庁)より作成

